あなたの一票は、誰のため？

児湯支会　代表　黒川　瑠渚

「私たちは、娘であるあなたのために選挙に行ってるよ」大学生の頃、両親に言われた言葉です。投票するというのは誰のことを考えた行動か。それまで深く考えたことのなかった私にとって、選挙に対する意識が変わるほど衝撃的な言葉でした。

それまでの私に「何のために投票に行くんだろう？」と質問したとしたら、間違いなく「なんとなく」と回答しているでしょう。私はしばしば問題視される、政治や選挙に関心のない若者の一人だったのです。知識のない自分が投票することに意味があるのだろうか。選挙が一票差で決まることはほとんどないのだから、一票の価値など軽いのではないか。選挙は行かないといけない、という義務感のみで投票していたように思います。

そんな自分の呑気な考えに対し、両親は私のために選挙に行っていると言うのです。私が、また、その先将来を担う子どもたちが暮らしやすい社会になるにはどうすればよいかを考えて投票していたのです。私は選挙への意識が変わるほど衝撃的な言葉だったと先述しましたが、その要点は「当事者意識」にあると考えました。

私は、選挙の意義といえば「日本を、社会を良くするために行くもの」と考えていました。もちろんその考えも一つですが、私はその主語の大きい意義を真面目に捉えるあまり、選挙が自分には関係ない他人事のように感じてしまったのです。

それでは「当事者意識」とはどういうことか。今年行われた第 49 回衆議院議員総選挙ですが、ある調査によると、18 歳の投票率が国政選挙で初めて 50%を超えたようです。先の選挙の特色ある争点といえば「新型コロナウイルス・経済対策」でした。誰もがその争点と、自分や家族を中心とした日常生活を絡めて注目したのではないでしょうか。私はそういった、政治や選挙を自らの生活と関連付けて関心を持つ意識こそが、政治・選挙における「当事者意識」であると考えます。その意識こそが、私を含めた若者が持つ一票の大切さについて考えさせてくれるのです。

では、私は誰のために一票を投じることを考えるのか。もちろん私自身と家族が暮らしやすい将来のために。主語が「日本」や「社会」より身近な分、グッと自分事として捉えることができるようになりました。

また、「誰のために」とは、それぞれのライフステージなどにも影響され変化していきます。私は昨年、公務員として都農町役場に入庁しました。それまで

とは違い、地元である都農町が、町民の皆さんが現在、また 10 年や 20 年後により暮らしやすい町になるようにという新たな価値観が加わりました。学生の頃と比べて広がったこの「当事者意識」が、これから先結婚、子育て、退職等様々なステージを経てさらに広がっていくのでしょう。

　そう考え始めた私は、もう政治や選挙に関心の低い若者ではありません。度々注目されるこの問題ですが、物事に対する意識を少しだけ変えることで見えてくる価値観もあるのではないでしょうか。

　「あなたの一票は誰のためですか？」今まで考えたことのなかった方も、まずは自分と家族、身近な人たちの暮らしやすい未来について思案してみるのはいかがでしょうか。